

2022 年度 霊南坂幼稚園 学校評価報告書

学校評価委員会

学識経験者	3名
地域住民	2名
幼稚園在園児保護者	1名
幼稚園卒園児保護者	1名
幼稚園から園長 後宮敬爾 主任 小林由美恵	

評価時期 2022 年 3 月

1 保育全体について

コロナ禍においても、こどもの成長と発達のためによく工夫をした保育が展開できている。

保護者アンケートの結果は、ほぼすべての項目で、「とても良い」という A 評価をうけていることは、素晴らしいことである。

重点教育目標に関しても、努力をしていることが伺え、成果が子どもたちの姿として達成できている。

小規模幼稚園として、ひとりひとりを大切するという建学の精神に則った保育が実践されている。

2 保護者との関係

保護者アンケートの自由記載の欄から、保護者との良い関係が醸成されていることを伺うことができる。

3 課題

地域に向けて、霊南坂幼稚園の保育実践を伝えていけるよう、HP の改善などにとりくんできていただきたい。

4 環境整備

年々、保育環境の整備が改善されている。

霊南坂幼稚園 2022年度 自己評価

1 霊南坂幼稚園の教育目標

キリスト教精神に基づき、一人ひとりの個性を大切にしながら、幼児の遊びの生活を中心として、生きる力の基礎を育みます。また、異年齢活動を積極的に取り入れ、豊かな人間関係力を育てます。

2 2022年度の重点教育目標

2022年度はコロナ禍3年目の保育となる。コロナ禍を過ごす中で、子どもたちは自然に経験しているべきことを、経験できずにこれまでの時を過ごしてきた。日常的には、マスク常用の中で、表情全体を使った自己表現や、他者の気持ちを受けとるというコミュニケーション経験の不足。また、身体を動かす機会が少なく、特に、園児相互で同時的に運動するという機会を持つことができなかった。食事の面でも、「黙食」が続く中で、楽しい食事の時間という経験も決定的に不足している。教育においては、大きな行事がほとんどできずに、幼稚園の施設の中で、安全、安定を確保した活動に終始してきたことは、幼児の新しいものに向かって行く探究心を育む機会が少なかったということに通じる。

2022年度もコロナ感染防止の対策を講じなければならないが、今まで経験できなかったことを大胆に保育に取り入れながら、子どもたちの「子どもらしい経験」から生まれる「子どもらしい生活」を回復していくことを目標としたい。

重点教育目標として

第1点目は、「自発あそび やってみよう」とした。こうした状況の中で、子どもの内発的な意欲を育むものは、霊南坂幼稚園で積み重ねてきた「自発あそび」である。子どもたちの中から新しいことや未経験のことに「やってみよう」という意欲的な取り組みが生まれるような環境を設定していく。日々の保育の中での自発あそびの充実を一層求めて行きたい。

第2点目は、「礼拝 いつも心をかよわせて」とした。霊南坂幼稚園の保育における礼拝の役割は大きい。自由に遊ぶことにおいて得られた充実感に基盤づけられた「緊張と集中」の時である。この時、子どもたちは礼拝で語られることばに

心を澄ませて集中し、心を合わせて共に歌う。その時間における経験の質を高めることにおいて、自発あそびなどで経験したことが、統合され、整理されていく。

第3点目は、「異年齢活動 すきになって、つながって」とした。霊南坂幼稚園の保育の特徴は、自然な関係の中で実践されている異年齢活動である。幼児たちは、自発あそびの中で、異年齢の子どもと自然に出会っている。そして年長児と年中児、年長児と年少児、年中児と年少児という発達の度合いが異なるものが、相互に交流し、一緒に活動をしていくことになる。そこには、同学年同士の活動以上の刺激があるのだが、そこに至るためには、双方の工夫と努力が必要になる。その中で年長児は年長らしく成長し、年中児年少児は年長児への憧れをもってモデリングによる成長を遂げていく。さらに、この異年齢活動を更に豊かにするために、異年齢クラスが合同で積極的に活動をする機会を設け、この活動の意味を深めて行きたい。

第4点目として「クラス ちからをもらって」をあげている。クラス活動の中で、互いに支え合うということを経験してほしいという願いがある。この2年間コロナ禍を過ごす中で、どうしても互いの交流が十分にできずに過ごしてきた。どうしてもクラスの中での経験が貧しくなりがちであり、そこから幼児相互の関係性が希薄なものとなっている。そこでクラス活動では、互いに助け合う、支え合うということに取り組みたい。友だちや教師たちに、支えられ、ちからをもらうという経験を相互にすることにおいて、友だち関係の信頼を深めてほしい。年間の大きな行事、プレイデイやクリスマスを大切な機会として、そこに向かっていける日常のクラス活動を考えて行きたい。

3 評価項目の達成及び取り組み状況

(1) 「自発あそび やってみよう」

結果 A (充分達成されている)

理由 年間を通して自発あそびに積極的に取り組んできた。担任団が中心になって、折々の子どもたちのあそびについて分析・評価をして、次の展開を考えてきた。子どもたちの中から、たくさんの継続的な集団遊びが生まれてきた。保護者アンケートでも高い評価を受けることができたが、これは子どもたちが自発あそびをしている姿を見てもらえる機会が増えたということと、保護者会や懇談会、園便り、子育て講演会などで機会ある毎に自発あそびについての考え方や、その

評価点について訴えてきたことも大切であっただろう。

(2) 「礼拝 いつも心をかよわせて」

結果 A (充分達成されている)

理由 礼拝において、年少児から年長児まで、子どもたちは真剣に耳を傾けている。そして、讃美歌を、とても良い声で心を合わせて歌うことができている。今年度は、礼拝堂の中だけで集中するのではなく、礼拝に向かう時、礼拝から帰るときにも集中をすることを心がけて指導をした。その結果、質の高い時間を過ごすことができた。

(3) 「異年齢活動 すきになって、つながって」

結果 A (充分達成されている)

理由 今年度の活動の中で、良い展開を行えたのがこの項目だと思う。特に三学期、年長児を送るために、「兄弟グループ」という異年齢小集団をつくり、それを活かした活動をしながら、卒園への歩み構成した。これは、昨年度の反省に基づいたもので、その取り組みの効果は大きかったと考えている。幼児相互の成長が実感できる活動になった。これは保護者アンケートでもきわめて高い評価を受けることができた。

(4) 「クラス ちからをもらって」

結果 A (充分達成されている)

理由 クラス活動において、まずは「自分のことは自分でできる」という自律性を求めてきた。その上で、困難が生じたときに、よく話し合いながら、問題の解決にあたるように心がけてきた。幼稚園からの食事提供という機会を再開し、その経験を重ねることで、互いに「美味しいね」「楽しいね」という会話も自然に産まれるようになり、活動の中で、クラス相互の関係を深めていった。その中でダンスが果たした役割は大きかった。互いに支え合い、友だちや教師からちからをもらうという経験をし、その経験に基づいて、友だちを支え、励ますちからを育ててきた。コロナ禍にあっても、その面における子どもたちの成長を感じることができた。

結果 A（充分達成されている）

この1年もコロナ禍は継続され、コロナ感染対策の中で、活動にはいろいろな制限があった。しかし、その中でもできることはやっていきたいと考えて、春の遠足が雨で幼稚園内活動になったことを取り戻すために、9月に遠足をを行った。それが典型的だけれど、制限がある中でも、できるだけ多様な質の高い経験ができるように、日々の保育の中で検討を重ね、実践してきた。

その結果、当初の目標であった、子どもたちの「子どもらしい経験」から生まれる「子どもらしい生活」を回復していくことという目標を概ね達成することができたと評価している。

どこか自信なさげだった年長児たちが、卒園を前に、それぞれに落ち着いた様子で、自信に裏打ちされた自己表現できるようになって、卒園を迎えようとしているし、年中児たちは、エネルギー豊かな活動を継続してきた。また、年少児も生活習慣を身につけながら落ち着いて進級に向かっている。

特筆すべきことは、教師たちが保護者に深く信頼されているという点である。これは教師たちの日常的な丁寧であたたかな対応が功を奏している。

課題としては、少子化という社会状況はありながら、在園児の数が減少していることである。来年度の課題として取り組んでいきたい。また、HPによる情報発信のあり方も検討すべき事柄である。